

史料としての書簡集
—青年ミシュレにおける歴史と哲学（1820-1827）—
The Correspondence of Young Michelet (1820-1827):
History and Philosophy

立川孝一
TACHIKAWA Koichi

はじめに

ミシュレの『書簡集』の出版が完了すると同時に、ラマルティエヌの書簡集の刊行が始まった¹⁾。アナールの創始者L・フェーヴルとM・ブロックの往復書簡集も刊行が進められている。『記憶の場』の編者P・ノラが予言したように、いまや歴史家自身が記憶の場として歴史——あるいは歴史の歴史——の対象になりつつあるのかもしれない（序論「記憶と歴史のはざまに」を参照）。

ミシュレの伝記的研究の資料としては、彼自身が生前に出版した『民衆』（1846）の中のキネにあてられた「序文」²⁾、ミシュレ未亡人アテナイスが編纂した『私の青春』（1884）と『私の日記』（1888）³⁾、そして近年になってP・ヴィアラネがオリジナル原稿をもとに刊行した『日記』と『メモリアル』⁴⁾などがあるが、これらの自伝的資料はミシュレの少年期については詳しいが、彼が1822年にアグレガシオンの試験に合格して教師の道を歩み始め、1827年にヴィーコの『新しい学』のフランス語訳を出版して学者として認められるようになった時期——彼の修養時代——については情報がきわめて乏しい。公刊された著作も、2～3の教材を除けば、この時期には皆無と言ってよい。

それ故『書簡集』は、ミシュレ研究における「空白期」を埋める貴重な史料と言える。加えて刊行された『書簡集』は、ミシュレ自身によって書かれた手紙だけではなく、ミシュレにあてて書かれた彼の友人、知人、同僚などの手紙が多数収録されていて、彼をとりまく人間関係を知るためには格好の材料を提供してくれる。著作や日記からだけでは窺い知ることのできない社会人としてのミシュレのもうひとつの顔を『書簡集』はわれわれに教えてくれるのではないだろうか。

ミシュレの書簡集は全12巻（1994～2001年）で、彼自身が書いた書簡と彼にあてて書かれた書簡の双方を収録している。番号を付された書簡の総数は12,844通に及ぶが、本稿で取り

¹⁾ Jules Michelet, *Correspondance générale*, 12 vols., Textes réunis, classés et annotés par Louis Le Guillou, en collaboration, pour la partie E. Quinet, avec Simone Bernard-Griffiths et Ceri Grossley, Paris, Libraire Honoré Champion, 1994-2001.

²⁾ 大野一道訳『民衆』みすず書房、1977年。

³⁾ *Ma Jeunesse*, Calmann Lévy, 1884.

Mon Journal, G. Marpon et Flammarion, 1888.

⁴⁾ *Ecrits de Jeunesse*, Texte intégrale, établi…par Paul Viallaneix, Gallimard, 1959. ここには『日記』（1820-23）、『メモリアル』（1820-22）、『思索日記』（1818-29）、『読書日記』（1818-29）など青年期の草稿が収録されている。

上げる 1820 年から 1827 年までの期間では 372 通である。その他、注の中に挿入された関連書簡（ミシュレの父ジャン＝フルシの書簡等）を加えれば約 400 通となる。

史料としての書簡の有効性については問題もあり、ミシュレ生誕 200 周年のコロークにおいて C・クロワヅルはそこに過度の期待を寄せてはならないと警告を発している。「書簡を読めば、個人の性格について正確な理解が得られるものと一般には言われているようだ。…だがミシュレの場合は全くそうではない。彼の書簡を読んだだけではきわめて不十分な理解しか得られないし、もっと悪いことには、あやまった理解をしてしまうことすらあるだろう」⁵⁾。

何故そうなのか。クロワヅルは二つの理由を挙げている。第 1 は、ミシュレが内向的な人間であったからで、そのため親友であった E・キネ（1803-1875）に対してさえ、自分をさらけ出すことをしなかったという。第 2 の理由として、ミシュレは著作の執筆にとりかかるとそれに没頭してしまい、手紙を書かなくなるか、書いたとしてもその著作についてはごく簡単にしか触れていないという。かくしてクロワヅルは、書簡集の読者を意気阻喪させるような言葉でその報告をしめくくっている。「書簡集から大いなる利益を引き出したいと思うなら、彼の人間となりと作品についてあらかじめ知っておくことが望ましい」⁶⁾。

とはいえ、筆者はクロワヅルの悲観論に必ずしも与するものではない。第 1 に、われわれは書簡集をあくまで史料として利用しようと考えているのであり、文学研究者が G・サンドやフロベールの書簡の中に見出したものと同じ感動をそこに期待しているわけではない。第 2 に、本稿であつかう時期（1820-27 年）のミシュレとクロワヅルが選択した時期（1830-1851 年）のミシュレとではその社会的地位に大きな違いがある。歴史家としての地位をすでに確立し、コレージュ・ド・フランスの教授ともなっていた後者に対して、前者は全くの無名に等しい学校教師である。「著作を通してその人となりを知る」段階には至っていないのである。従って、この時期のミシュレを知るための主たる資料としてこれまで最もよく用いられてきたのは、彼の『日記』であろう。歴史資料としての『日記』については、筆者はすでに問題点を指摘した上で、これを用いて「ミシュレの青春時代」を描く試みをおこなっている⁷⁾。

筆者は本稿において再びミシュレの「青春時代」を取り上げることになるが、視点は異なる。前回においては、ミシュレの生い立ちから妻ポーリーヌとの出会いまでを「私生活」を中心に論じていたが、今回は彼の「公的生活」、つまりヴィーコの歴史哲学に到達するまでの、ミシュレの修養過程に光をあてる。『書簡集』は、たとえクロワヅルが言うように彼の人間となりについては雄弁でないとしても、彼をとりまく環境——学友、学校の教師仲間、あるいは上司、そして出版関係者——については詳細な情報を提供してくれる。主観的な史料であった『日記』とくらべ、『書簡集』は社会人としてのミシュレを知るためにはきわめて有効な客観的史料なのである⁸⁾。

⁵⁾ Christien Croisille, «Regards sur la correspondance de Michelet», *Cahier Romanitique*, n°6, *Michelet entre naissance et renaissance (1798-1998)*, Actes du colloque du bicentenaire 1998, Textes réunis et présentés par Simone Bernard-Griffiths avec la collaboration de Christien Croisille, Clermont-Ferrand, 2001, p. 180.

⁶⁾ *ibid.*, p. 192.

⁷⁾ 拙稿「ミシュレの青春時代（1798-1824）」『歴史人類』29 号, 1997 年。

⁸⁾ 本稿執筆にあたっては数多くのミシュレ研究を参照したが、生誕 200 周年をめぐって出版された最近の研究のみを挙げておく。

I 書簡集に登場する人々

『書簡集』は1820年5月21日にミシュレが友人ポワンソにあてた手紙から始まっている。ミシュレ21才のときである。本稿では1820年から1827年（ヴィーコ『新しい学』のミシュレ訳が出版された年）までの時期に限定されるが、収録された書簡は372通である。手紙の内容に立ち入る前に、ミシュレが手紙を書いた相手と、ミシュレにあてて手紙を書いた人間とがどのような人たちであったかを確認しておこう。

書簡の受取人と差出人（1820-27年）⁹⁾

① 友人	ポワンソ	19	
	ポーレ	39	
	キネ	5	
	その他	13	76
② 家族（親族）	ポーリーヌ	9	
	父	3	
	セレスティーン	9	
	その他	22	43
③ 恩師・上司（学校）	アンドリュウ	4	
	ヴィルマン	2	
	ロワイエ＝コラル	1	
	ニコル兄弟	9	
	フレシヌ狛下	3	
	その他	10	29
④ 恩師（思想）	クーザン	6	
	ギゾー	3	
	シスモンディ	4	
	コンスタン	2	
	その他	16	31
⑤ 同僚（ポーレを除く）			85
⑥ 学生（親を含む）			44
⑦ 出版関係者			22
⑧ その他			42

（ミシュレから 54 ミシュレへ 318） 372

Paul Viallaneix, *Michelet, les travaux et les jours 1798-1874*, Paris, Gallimard, 1998.

Arthur Mitzman, *Michelet ou la subversion du passé*, Quatre leçons au Collège de France, Paris, La Boutique de l'histoire, 1999.

大野一道『ミシュレ伝 1798-1874——自然と歴史への愛』藤原書店, 1998年。

⁹⁾ *Correspondance générale*, tome I の索引をもとに筆者が作成。

ミシュレ自身によって書かれた手紙は54通、ミシュレにあてて書かれた手紙は318通で、その比率は1対6となる。ミシュレは受け取った手紙についてはよく保管していたようだが、残念なことに彼が書き送った手紙はあまり多くは残っていない。1830年から1851年までの書簡を検索したクロワヅルによれば、ミシュレによって書かれた手紙は1630通、彼が受けとった手紙は3810通で、比率は1対2に近い¹⁰⁾。

1820年代のミシュレ自身の手紙があまり多く残っていないのは、この時期のミシュレがまだ無名の教師であったこともその理由のひとつであろう。

書簡集の全体像をつかむために、ミシュレの手紙であるかないかは区別せず、372通の手紙にかかわる人々をひとまとめにして分類してみた。ミシュレとの関係が明瞭である人々は以下のように7つのグループに分けることができる。

①「友人」の筆頭はやはりポワンソ(1798-1821)であろう。1820年5月に始まった2人の書簡は翌年2月14日のポワンソの死によって中断しているから、その頻度はきわめて高いと言える。しかもその比率はミシュレから9通、ポワンソから10通というように均衡している。これに較べてポーレの39通はすべてポーレによって書かれたもので、ミシュレによって書かれた手紙は1通も残っていない。ポーレは、ポワンソを失った後のミシュレにとっては第1の友人となるのだが、真の意味でポワンソに代わる心の友ではなかった。彼はむしろ第5のグループ(「同僚」)の筆頭に位置する人であり、その意味では社会人としてのミシュレにとって貴重な同僚だったと言える。後に「盟友」として大きな存在感を示すことになるキネとの間には5通の書簡しか残っていない(ミシュレからは1通のみ)。書簡のやり取りが増えるのは、ドイツのハイデルベルクに留学していたキネをミシュレが訪れる1828年以降のことである。

②「家族(親族)」として最も多いのは妻ポーリーヌと従姉セレスティーヌ(1796-1840)の各9通である。結婚(1824年)以前にはミシュレとポーリーヌの間に手紙のやりとりはなかったらしい。夫ミシュレが妻に手紙を書いたのは、一方の旅行のため夫婦が別居を余儀なくされたときに、夫がまず妻に手紙を送り、娘アデルの近況を尋ね、妻がそれに答えるというパターンであった。他方、母方の従姉セレスティーヌであるが、彼女は研究者の道を志していたミシュレにとって良き理解者であり、彼の著作に対する鋭い批評家でもあった。ちなみにこのグループで「親族」というのはすべて母方のミレー家とルフェーヴル家の人々であり、セレスティーヌを加えれば31通になる。ポーリーヌと結婚する直前にも、ミシュレはミレー家のおばたちに対して長文の手紙を送っている。

③-④「恩師・上司(学校)」と「恩師(思想)」の2グループをはっきり分けるのは難しい。③に分類したメロー塾のメロー、コレージュ・シャルルマーニュの教授アンドリュウはともかく、ヴィルマンは後にソルボンヌの教授となり、ミシュレの昇進に力を貸すことになるし、ロワイエ＝コラルは哲学界のみならず、政界・教育界の大物であり、いわばミシュレのパトロンの存在でもあった。④にその名が出てくる哲学者クーザン、歴史家ギゾーとの関係も、彼らからミシュレが受けた恩恵は純粋に「思想」的なものだけではない。要するに、教育と研究、学問と政治とは、ここに挙げた学者たちにおいては密接に関連していたのである。

明らかに「上司」と言えるのは、コレージュ・シャルルマーニュの校長であったH・ニコルとその兄でパリ大学区長(Recteur de l'Académie de Paris)のD・ニコル、そして文部大臣(正式には教育機関首長 grand maître de l'université)のフレシヌ猊下の3人であろう。

¹⁰⁾ Christien Croisille, *op. cit.*, p. 176.

⑤ 「同僚」とはといっても、新米教師であったミシュレにとっては、アグレガシオン同期生のポーレだけが気をゆるせる仲間であり、その他の人々は彼より年長の教授たちであった。その中の1人ラゴン（コレージュ・ブルボンの近代史教授）とは教科書出版をめぐる一時悶着を起こしかけたが、シャルルマーニュ校の中世史教授カイクスらのはからいで和解するという一幕もあった。このようにスリリングなやりとりもあったとはいえ、「同僚」間の手紙は全体としては会議の召集とかカリキュラムの調整などの事務的な内容のものが多く、85通という量の割には刺激に乏しい。

⑥ 「学生」のグループにはその親からの手紙も含めて44通あるが、1～2の例外（サン＝プリースト、モンタランベール）を除いて、のちにミシュレの娘アデルの夫となるA・デュメニルのような深い付き合いはまだ見られない。

⑦ 「出版関係者」との通信は、コレージュの教材『近代史年表』をコラス書店から出版する頃から毎年のように交わされることになるが、「事件」になりかねなかったのは弁護士アリエ氏とのやりとりである（1826年）。ヴィーコのフランス語訳の出版をルヌアール書店と交渉していたミシュレは、翻訳権を主張するライバルの出現に驚かされるが、すでに教科書問題（1825年）で貴重な体験をしていたミシュレは、ここではほとんど独力で難局を切り抜けることに成功する。もっともミシュレの遅筆に嫌気のさしかかっていたルヌアール書店にはたらきかけ、出版をなしとげさせたのは「大御所」クーザンの一声があったからでもある。

以上に見てきたように、ミシュレの書簡の相手は友人・親族から出版関係者まで多岐に渡っているが、われわれはまず「友人」ポワンソとの交流からはじめ、少しずつ「教師」、そして「歴史家」としてのミシュレに迫っていくことにしよう¹¹⁾。

II 歴史哲学への道（1820-1827）

1 ポワンソ

『書簡集』の出だしはポワンソとの間に交わされた19通の往復書簡である。ミシュレは1820年5月4日に彼の『日記』を書き始め、5月21日には最初の「手紙」をポワンソあてに書き、6月4日には自伝『メモリアル』の執筆に着手し、さらに9月20日には『思索日記』を付けることを決意している。ちなみにこの年の2月13日にはベリ公の暗殺事件があり、さらに6月5日には選挙権と言論の自由に制限を加える新たな法令に抗議するデモが起こり、これに加わっていたパリ大学の学生が死亡するという事件が起こっている。

ミシュレが学士号を取得し、ブリアン塾の教師となったとき（1818年）、彼は20才になったばかりであった。翌年には博士号を取得し、1821年にはアグレガシオンの試験に合格し、母校コレージュ・シャルルマーニュの講師（臨時採用教員）になるのだが、1820年のミシュレは、教師をするかたわらアグレガシオンの準備をしている22才の若者であった。

この時期のミシュレが『メモリアル』などの自伝的な記録を書いていた理由としては、青年期における自我の芽生えということも考えられるが、それがただ1人の友人ポワンソに向けて書かれたものであったことを忘れてはならない。10年後のミシュレはもはや書簡の中で「内

¹¹⁾ 以下本稿で引用される書簡（《 》で示してある）はそのすががミシュレの『書簡集』第1巻に収録されている。書簡には通し番号が付けられているが、ここでは省略し、年月日のみを記載することとした。ただし、『書簡集』の注の中に掲載されたミシュレの父ジャン＝フルシの手紙については、頁数でその所在を示した。

面」について多くを語らないだろう。だがポワソを相手にしたときのミシュレは過剰なまでに「自己」について語り続ける。ただし、それが長く続くことはなく、1821年2月14日のポワソの死によって中断することになる。ミシュレにとって厳密な意味の「青年時代」はこの時に終わったと言えるのかもしれない。われわれもここでは2人の友情の深層に入りこむことはせず、むしろ2人の間に交わされた世間的な話題の中に、社会や歴史に対する感性のありようをさぐることにしよう。

「政治」、あるいは「歴史」について、この時期のミシュレはまだ否定的反応しか示さない。ポワソの医学（自然科学）にくらべて人間の科学はいまわしさと無縁ではなかった。《精神の醜さは物質（身体）の醜さ以上に醜い》。《歴史はもっと悲しく、惨めだ》（1820年5月26日、ミシュレからポワソへ）。

6月5日、パリでは学生たちによる大規模なデモが発生する（選挙権と出版の自由を制限する法令に対する抗議）。デモ隊はテイルリの広場からフォブール・サンタントワヌへと向かったが、警備隊と衝突し、リボリ通りで学生が一名殺される。当時のミシュレはロケット通り45番地（バスチユ広場とペール・ラシェーズ墓地の中間）に住んでいたから、デモ隊が発する叫びを聞くことができた。6月5日付けのポワソあて書簡にミシュレは「革命第3年」と記す。《僕は奇妙な感覚に捉えられた。それは恐怖（terreur）であり、熱狂だ》。《それはいつまでも続く叫び声で、巨大であるが故にこの上なく恐るべきものだ》。《この巨大な声は僕の想像の中で民衆を具現している。それはただひとりの人間として立ち上がる》。

「民衆はひとりの人間として立ち上がる」という表現は27年後に刊行が始まる『フランス革命史』を予告するかのようだ。われわれは22才のミシュレの中に後の歴史家の文体——あるいは歴史の捉え方——の特徴を見出すことができる。彼はリボリ通りで殺された大学生のように自ら政治活動に参加することはなかった。街頭ではなく、おそらく家の中で遠くから伝わってくる大群衆の「声」を聞いたのである。

目に見えないもの、形をなさないものを想像で捉える能力、それは歴史家としてのミシュレを特徴づける才能であるが、必ずしも「天分」だけで説明できるものではなく、むしろ貧しさの中で夢見つづけてきた孤独な少年時代に身に付けた習性であったのかもしれない。いずれにしても、22才のミシュレは自身の想像力が「欠乏」の代償であること、そして想像の中で生きることが彼にとっての「現実」であることをすでに認識していた。6月4日のポワソあて書簡の中には、50年後に書かれることになる『フランス史』序文（1868年）を髣髴とさせる一節がある。《対象が欠けているとき、想像力はそれを一層生き生きと表現する》。《モンテーニュは次のように言っている。「私は自身について『エッセー』を書き上げたが、そのあとでは『エッセー』に基づいて自身を作り上げた」》。

モンテーニュの『エッセー』の中にこの言葉は見当たらない。これはモンテーニュを借りたミシュレ自身の言葉なのである。

2 コレージュの教師

1821年2月14日、ポワソは死ぬ。すでに前年から彼の肺は結核に冒されていたのである。われわれはここでポワソとは別れねばならない。ミシュレ自身、まもなく『日記』や『メモリアル』を投げ出してしまうだろう。彼の当面の関心はまぢかに迫ったアグレガシオンの試験である。

(1) 第2の友 ポーレ

1821年9月21日、ミシュレはアグレガシオン（文学）に第3位の成績で合格する。10月13日には母校シャルルマーニュの講師（臨時採用）となり、翌1822年11月13日には、名門校として知られるコレージュ・サントバルブの歴史学教授の地位を得る。書簡の相手は、シャルルマーニュ時代の級友で、アグレガシオンを首席で合格し、すでにサントバルブでギリシア語と哲学の教授になっていたポーレ Pierre-Jacques-Hector Poret (1799-1864) である。彼はアグレガシオン合格者の中では首席であったので、即座にサントバルブ校に就職が決まり、ミシュレが翌年にシャルルマーニュの臨時講師からサントバルブの専任教授に転ずるにあたっても仲介者の役割を果たしている。また1824年にミシュレを哲学者クーザンに紹介したのもポーレである。だがすでに触れたように、この時期の2人間の書簡は全くの一方通行で、39通の手紙はすべてポーレからのものであり、ミシュレからの手紙は1通も残っていない。それ故、ミシュレの内面については窺い知ることができないのだが、ポーレの語りを通してミシュレの知的活動を再構成することはできる。1821年4月の書簡の中でポーレはスコットランドの哲学者D・ステュアートの著書に言及している。《D・ステュアートの本を君に送る。…彼は自分の議論の力を過信していないし、狂信や偏見なしにその限界をわきまえているので、僕には大変慰めになる》。

エディンバラ大学において「道徳哲学」の教授であった Dugald Stewart (1753-1828) については、その著書が縁となってミシュレは哲学者クーザンを知り、さらにはヴィーコの哲学を発見することになるのだが、これについてはあと [II-3] で触れるとして、アグレガシオン合格からシャルルマーニュ校着任までの経緯について見ておくことにしよう。

(2) 庇護者たち

ミシュレの父ジャン＝フルシはグザヴィエ・ミレー [亡き妻の兄弟] にあてて以下のように書いている。《[息子は] トゥルーズの修辞学の教授に指命されたけれども、…パリを離れる気持がなかったので、拒否した。彼は大学区長 [C-D・ニコル] に向かって、パリで地位が得られるまで待ちたいという希望を表明した》。《このような拒絶が彼にとって不利になるのではないかと私は心配したのだけれども、さいわいにも大学区長は次のように言ってくれた。「審査員たちが貴方について提出した報告書を見ましたが、私たちは貴方をパリに留めておきたいと望んでいます。地方の教師になりたくないというのなら、パリのコレージュのどこかのポストが空くまでのあいだ、とりあえずはコレージュ・シャルルマーニュの上級学年の臨時採用教員 (professeur suppléant) に任命しましょう」》¹²⁾。

ミシュレはもはや不遇な学生ではなかった。首席で卒業したコレージュの受賞式 (1816年) 以来、彼にほほえみかける貴顕の士の数は決して少なくはなかった。ここで青年ミシュレを支えた彼の「庇護者たち」の顔ぶれを見ておくことにしよう。

まず父の手紙にその名が出てきたパリ大学区長 (Recteur de l'université) シャルル＝ドミニク・ニコル Charles-Dominique Nicole (1758-1835) であるが、ロベスピエールと同じ年に生まれたこの人物は、1789年にはサントバルブ校の教授であった。だが大革命の開始後まもなく国外に亡命し、ロシアでリシュリュエ公と出会い、その息子の教育係となった。こうした縁がもとで、王政復古後にリシュリュエ公がルイ18世の下で権力を握るに従い、ニコルの社会的地位も上昇した。1820年にパリ大学区長に任命されるや、弟ガブリエル＝アンリ・ニコル

¹²⁾ *Correspondance générale*, tome I, p. 64 n.

をサントバルブ校の校長に就任させている。

コレージュ・シャルルマーニュにおいてミシュレの恩師であったアベル＝フランソワ・ヴィルマン Abel-François Villemain (1790-1870) は後にソルボンヌ大学教授、そして公教育大臣へと上昇し、常にミシュレの支えとなった。ヴィルマンにとってコレージュの最終学年を首席で卒業したミシュレは、まちがいなく最愛の弟子の1人であった。ミシュレは卒業生総代として演説を述べる荣誉に浴するのであるが、目の前には恩師ヴィルマンは勿論のこと、大学区長ロワイエ＝コラルと首相リシュリユーが臨席していた。こうしてリシュリユー公、ニコル兄弟、ロワイエ＝コラル、ヴィルマンといった復古王政における実力者たちのネットワークがミシュレを保護するかのようにはりめぐらされていたのである。

ギゾーと並んで「純理派」*doctrinaires* の論客として知られるピエール＝ポール・ロワイエ＝コラル Pierre-Paul Royer-Collard (1763-1845) もまたこの時代の知識人らしく、学者であり、教育者であり、政治家でもあった。政治的には左（自由主義）と右（王党主義）の間で揺れうごき（大革命末期には五百人議会議員、1824年には王政復古期の国会議長）、思想的にも合理主義と神秘主義の中間を行く折衷主義（*éclectisme*）の立場をとり、V・クーザンに影響を及ぼした。ミシュレはボワンソにあてた手紙（1820年5月26日）の中で、B・コンスタンとロワイエ＝コラルの名を挙げ、議会における彼らの演説を賞讃している。かくしてロワイエ＝コラル、ギゾー、そしてクーザンという、王政復古期におけるリベラル派知識人（「純理派」）の系列の末端にミシュレも連なっていたのである。

最後にルイ18世の聴聞司祭（フランス王室付祭司長）であり、1822年から1828年までフランス教育機関首長（*grand maître de l'université de France*）であったフレシヌ猊下 Monseigneur Frayssinous (1765-1841) について触れておく。フランス革命期の聖職者に課せられた誓約を拒否して亡命したこの高位聖職者は、ロワイエ＝コラルなどとは異なり、骨の髄までの王党派であった。復古王政下で宗教大臣（1824-28）などの要職についていた間、彼は様々な反動的政策を打ち出した（エコール・ノルマルの閉鎖もその一つ）。だがわれわれにとって興味深いことは、このような反動的政治家さえもが——大学区長ニコルもそうだが——若きミシュレに対しては好意を示し、その将来に道を開いてくれたということである。

（3）歴史学の教師

コレージュ・シャルルマーニュの講師に着任した頃（1821-22年）ミシュレは何をしていたのだろうか。父ジャン＝フルシはミレー家の甥にあてて次のように書いている（1822年1月22日）。「今の所ジュールは哲学、とりわけイギリスの哲学者にとりくんでいる」¹³⁾。ヴェルサイユ市立図書館の閲覧票もまたミシュレの関心がどこにあったかを伝えてくれる¹⁴⁾。

- | | |
|-----------|------------------------|
| H・ドゥ・フェロン | 『進歩の理論』 |
| D・ステュアート | 『人間精神の哲学原理』 |
| | 『形而上学と倫理学の歴史叙説』（オシエル訳） |
| ファーガソン | 『倫理学と政治学の原理』1792年 |
| | 『市民社会史論』1767年 |

だがシャルルマーニュ校での最初の1年が終わろうとしていた頃、サントバルブでは「歴史」の講座開設が話題にのぼっていた。学校の内情に詳しいポーレからは次々と情報が送られてく

¹³⁾ *ibid.*, p. 71 n.

¹⁴⁾ *ibid.*, p. 72.

る。≪[校長の] H・ニコル氏はこの講座 [歴史学] の必要性を強く感じているようだ。…真の障害は、その筋 [教育機関長フレシヌあるいは大学区長の兄ニコル] の見解にショックを与えるのではないかと校長が恐れているためで、それが彼を躊躇させている。校長は [歴史学に対する] 兄の嫌悪感を克服しようと思っている≫ (1822年9月)。≪校長は、きわめて婉曲的な言い回しだけれども、彼の兄には歴史学の教育を支援しようという気持があるようだと言ってきた≫ (同年10月)。

では新設の歴史学講座が誰にゆだねられるのか、さすがのポーレにも見当はつかなかつたようだ。それでも彼はミシュレを推すために奔走をはじめ。≪カイクス氏の所へ一緒に行こう≫ (1822年10月31日)。

シャルル・カイクス Charles Caix (1793-1858) はシャルルマーニュ校の歴史学教授で、同時にアルスナル図書館の司書でもあった。主著『ローマ帝国史』(1836)の他に幾冊かの教科書を書いている。ポーレやカイクスの意見がどれほどの効力をもったかは分からないが、1822年11月13日、ミシュレはサントバルブの「歴史学教授」に任命される。おそらくはヴィルマンやニコル(兄)の推挙があつたのであろう。

ミシュレ本人は「歴史」の教師になることを望んでいたのだろうか。父ジャン＝フルシの手紙(1822年1月)によれば、ミシュレは「哲学」に没頭していたはずである。だが『読書日記』中の文献は1822年10月から変わり始める。ギボン、スコット、シスモンディなどの歴史関連の著作が主流となり、しかも大量に読まれていることが分かる。サントバルブへの転身は、臨時採用から専任への身分上の変化であつたが、同時にミシュレが「歴史」へと一步を踏み出す大きなきっかけになつたのである。1823年の『思索日記』には4年前に一度構想された「言語(語彙)に見出される諸民族の性格」というテーマが復活する。そしてヴィーコ(『古代イタリア人の知恵』)、ヘルダー(『人類の歴史哲学についての理念』)、スタール夫人(『ドイツ論』)の名が登場する。

サントバルブ校の第1年目、新米教師ミシュレはどんな歴史の授業をおこなつたのであろうか。

1823年8月18日、フランス教育機関首長フレシヌ猊下の邸宅では大学区の評議会 (conseil royal) が開かれていた。ミシュレの友人ポーレはサントバルブの校長ニコルに付いて評議会に同席していたが、席上サントバルブ校の新任教官ミシュレによる歴史の講義が話題になり、校長ニコルは大いに面目を施すことになる。ポーレは8月20日付けのミシュレあて書簡の中でこの日の会議について詳しく書き送っている。≪グノー氏 [Geuneau de Mussy, 『ジュルナル・デ・デバ』の評論家で、この当時は大学区の評議会のメンバーであつた] は校長に向かって、彼の歴史学教授を賞讃して次のように言った。「私は彼がどこで学んだのかさえ知らないが、彼の知性、知識、議論の仕方には大いに敬服させられた」。これに対して校長は、君 [ミシュレ] が1年目から他の先輩教師と肩を並べうとは思っていなかったと答えたのだが、グノー氏はそれが全く逆であることを説明し、君の将来が大いに有望であることを校長に納得させた。このことは教育機関首長と30人の評議員の面前で公に語られたことなのだ。…君は校長の評価において100フィート上昇した。…そのあと君のかつての成功、ヴィルマンが君に与えた評価 [1816年8月のシャルルマーニュ校での受賞] についても話題になつた≫。

3 クーザン——歴史哲学との出会い

サントバルブ校の歴史学教授ミシュレは独学で歴史の研究を進めていた。しかし4年間のコレージュ時代(1812-16年)、ミシュレは歴史の講義に出たことがなかった。何故ならフランス革命後、正確には王政復古後のフランスの学校において歴史教育は尊重されてはいなかったからである。むしろ警戒され、無視されていたと言った方がよいだろう。古代史の専門家カイクスがシャルルマーニュ校の教授となったのは1820年のことである(近代史はまだ危険視されていた)。大学区長C・D・ニコル氏の歴史嫌いは学校関係者のよく知ることであった。

われわれは前節〔II-2〕において、サントバルブ校の歴史学教授に内定したミシュレがその年の秋から猛然と歴史書を読みあさり始めていたことを見た。だがミシュレの「歴史」は依然として哲学色の濃いものであった。彼は以前から関心をいだいていたスコットランドの哲学者D・ステュアートの『形而上学、倫理学、政治学の歴史概要』*Histoire abrégée des sciences métaphysiques, morales et politiques*, 3 vol. (Buchonによるフランス語訳, 1820-1823)を読み続けていくうちに、その第3巻(1823)の末尾に付されたV・クーザンの補遺「歴史哲学について」に出会う。さらにまた翻訳者ビュシヨンの注解の中で、ステュアートが触れていなかったヴィーコの著作が紹介されていることを知る。ミシュレはクーザンの言う所の「歴史哲学」がヴィーコの著作『新しい学』の中で体系的に述べられているのではないかと直観する。

『読書日記』(1824年1月)の冒頭にミシュレは書く。「歴史哲学についてクーザンの論説を発見」。クーザンとの会見は、その3ヵ月後に実現する。

(1) クーザンとの会見

「金曜日の朝、クーザン氏の所に君と一緒に行くことにしよう」(ポーレ, 1824年4月)。

ミシュレの友人ポーレはギリシア語と古代哲学の研究者で、すでにクーザンとは付き合いがあった。プラトンの翻訳の手伝いをしていたのである。ポーレのはからいでクーザンに会うことのできたミシュレはその日の感激を『思索日記』(1824年4月19日)の中に書きとめている。「この瞬間は僕の精神生活にとっても決定的だ。ここで勇気を持てるなら、これからの僕は確固とした足どりで歩むことができるだろう。…僕の能力の開拓について言えば、クーザン氏の助言は僕の一生を通じて素晴らしいものになるにちがいない」。

ミシュレをこれほどまでに熱中させたクーザンとは何者なのか。ここで彼のプロフィールを簡単に紹介しておこう。ヴィクトール・クーザン Victor Cousin (1792-1867)はミシュレより6才年長にすぎず、1824年にはまだ32才になったばかりであった。しかしこの頃には「哲学の教皇」「巨匠(Maître)」と呼ばれるまでになっていた。彼は1815年には23才の若さながらソルボンヌにおいてロワイエ＝コラルの代講をつとめているが、フランスにカント、ヘーゲル、シェリングの哲学を紹介したその講義はドイツ哲学をフランスに広めるとともに、哲学界の若きリーダーとしてのクーザンの名声を高めることにもなった。ヴィルマンのあとを継いでエコール・ノルマルの哲学教授となるが、保守派(おそらくフレシヌ猥下)に睨まれて1822年にはその職を解かれ、逆に自由主義の旗手とみなされるようになる。ミシュレが出会ったときのクーザンは、このように1820年代の青年にとって輝くばかりの存在であった。

クーザンは1824年4月にミシュレと会い、歴史哲学やヴィーコの翻訳について何がしかの助言を与えたのち、ドイツへと旅だっていた(その頃ベルリン大学で「世界史の哲学」の講義をおこなっていたヘーゲルに会うこともその目的のひとつであった)。ところが、「自由主義者」とみなされていたクーザンはこの年の10月24日、プロイセンの警察によって逮捕され、翌1825年2月まで収監されてしまう(釈放されたのはヘーゲルからの働きかけがあったため

と言われている)。クーザンは5月12日にパリに戻り、ミシュレは5月23日に「恩師」と再会する。

クーザンの「その後」にまで話を進めるなら、彼は1828年にソルボンヌにおいて「哲学史序説」と題する講義をおこなって大講堂を学生であふれさせ、「事件」と言われるほどの反響を呼ぶ¹⁵⁾。7月革命後にはギゾーと並んで権力の中枢に加わり、1831年にはアカデミー・フランセーズ会員、1840年には公教育大臣に就任するが、皮肉なことにかつての弟子であり崇拜者であったミシュレやキネのような若い世代たちはクーザンから離れていくのである。

さて次項では、クーザンがD・ステュアートの著作の補遺として書き、ミシュレに衝撃を与えた「歴史哲学について」という小論について駆け足ながらも目を通しておきたい¹⁶⁾。

(2) クーザンの歴史哲学

クーザンの哲学は「折衷主義」*éclectisme* と呼ばれるが、それは18世紀の啓蒙主義と19世紀のロマン主義の中間にあって、理性と感情、自然法則と人間の意志(自由)、要するにマテリアリズムとスピリチュアリズムを統合しようとする試みであった。それ故、歴史観においても、一方では個別的・現実的な「事実」に目を向けるかたわらで、他方ではそれらの背後に存在すべき普遍的・合理的な「法則」を追求する。要するに「歴史」と「哲学」は一体であるべきだという「歴史哲学」に到達するのである。

とはいえ、これだけの要約では、クーザンの歴史哲学が歴史と哲学の折衷、あるいはヘーゲルの歴史哲学の単なる垂流ということになってしまい、ミシュレのような1820年代の若者たちがそれから受けた衝撃の大きさを理解しそこなってしまうかもしれない。われわれとしては、クーザンが描いた「時代」の心象風景から見ていくことが賢明であろう。1820年代の若者の精神状況の中に身をおいてクーザンを読み直すとき、彼の哲学は単なる空論とは聞こえなくなる。

《絶えまない革命の嵐が様々な状況下に次々と吹き寄せ、多くの帝国、党派、思想が崩壊していくのを目撃したわれわれにとって…、要するにわれわれ近代人にとって、絶え間なく変化する世界のこの表面はどうんざりするものはない。われわれをこれほどまでに痛めつけているこれらのゲームの意味しているものが何なのかと自らに問うことは当然のことではないだろうか》。

ミシュレやキネが生まれ、成長してきた時代の本質的特徴が描き出されている。大革命、ナポレオン帝政、そして王政復古——ミシュレはわずか20年の人生の間に3度の「革命」を体験している。《精神の醜さは物質(身体)の醜さ以上に醜い》。《歴史はもっと悲しく、惨めだ》(ポワンソあての書簡)と書いた頃のミシュレにとって、歴史とはできるならば思い返さずに忘れてしまいたい悪夢のようなものであったのかもしれない。けれども、そのような有為変転の中にも何がしかの意味が隠されているとクーザンが示唆したとき、ミシュレはそこから目を離すことができなくなった。無意識のうちに遠ざけてきた歴史の意味——自分だけではな

¹⁵ 1828年から1829年にかけてクーザンがおこなった講義は第1シリーズが「哲学史叙説」(1828)、第2シリーズが「18世紀哲学の歴史」(1829)と題されているが、クーザンは以下のような表題の下にその改訂版を出版している。V. Cousin, *Cours de l'histoire de philosophie moderne*, 2 vols., Paris, Didier, Ladrance, 1847.

¹⁶ テキストは下記のものを使用。Victor Cousin, «De la philosophie de l'histoire (1823)», *Philosophie des Sciences historiques*, textes réunis et présentés par Marcel Gauchet, Presses Universitaires de Lille, 1988, pp. 159-163 (Editions du Seuil, 2002, pp. 189-193).

い、自身の父や母がその中でもがき苦しんできた人生の意味——を解明してみたいという欲求が目を覚ましてきた。——筆者はクーザンの一節を読んでこのように想像してしまうのである。

《[歴史における]運動の本質は何か》《そこにはどんな目的があり、それはどこに向かっているのか》とクーザンは問いかける。だが、「事件」だけに目を奪われているこれまでの「歴史家」にそうした問いに対する答えを期待しても無駄である。表面だけの目に見える事実・出来事だけではなく、その奥に隠されていて外からは見えない本質について語らねばならないときに、歴史家たちは沈黙してしまう。それはむしろ哲学者の役割であり、それこそ真の歴史学、つまり歴史哲学なのだとクーザンは断言する。

(3) クーザンへの問い

1820年から1827年までの間にミシュレは計8通の手紙をクーザンに書き送っているが、期間は1824年5月から1825年2月までである。特に最初の6通は5月から7月に集中しているが、クーザンのドイツ行が迫っていたためであろう。最後の2通はクーザンの逮捕と釈放の時期に対応する。

クーザンを介して「歴史哲学」とヴィーゴを発見したミシュレは矢継ぎばやに質問を提出している。これに対するクーザンの回答は詳しくは分からないが、この時期のミシュレが「歴史」をどのように理解していたか、そしてそれを研究するためにどのような方法が必要だと考えていたか、などを窺い知ることができる。

①書簡(1824年5月-6月)

《ヴィーゴ、コンドルセ、ファーガソン、テュルゴ、アンシヨンの比較論にとりかかっています》

《ヘルダーの著作を読むことは延期せざるをえません》

②クーザン氏への質問A(日付不明)¹⁷⁾

ミシュレからの質問は以下の5点である。

1. 歴史哲学への準備として哲学の研究をどのように進めるべきか。
2. 因果関係と自由の関係の問題は特に掘り下げるべきであるか。
3. 政治学の研究は法律学から始めるべきか。
4. 歴史の研究は、個別の領域から始める前に、大きな時代的枠組の中で行うべきではないか。
5. 人類史の研究は、「理論」中心でいくのか、「事実」のみでよいのか。

③クーザン氏への質問B(日付不明)

1. 言語(歴史哲学の著者の)
2. 歴史の研究法
 - a 時代的大枠
 - b 単なる事実の学問(地理, 年代)
 - c 哲学的諸問題(因果関係, 自由…)
 - d 理論(法律, 経済, 政治, 神学)
3. 個別史(宗教, 政治, 法制, 言語, 文学, 自由学芸, 産業, 経済, 科学, 慣習, 商業な

¹⁷⁾ ギュー編の『書簡集』(第1巻)では②と③は単一のものとして分類されているが(no. 81)、ヴィアラネはこれを2通に分けている(Ecrits de Jeunesseの注)。内容的には③は②を発展させたもので、別の時期に書かれたものと思われる。

ど)

4. 総合（相互作用、全体のシステム）

ミシュレは1から4のプロセスを建築の解体と再構築にたとえ、歴史の構造に内在する法則性を明らかにしようとしている。

④書簡（1824年6月14日）

ヴィーコの翻訳についてはじめて具体的なプランが語られる。《ヴィーコの〔完全な〕翻訳が不可能ならば、その詳細な要約を作成したらよいのではないかと思います。私はそれを歴史哲学についての序論の中に盛りこむつもりです》。

⑤クーザン氏への質問（1824年6月20日）

質問のあとに付けられた（ ）の中には、クーザンからの回答と思われる。

1. 18世紀のイタリア文学の歴史（サルフィ）
2. 歴史批判の一般理論
3. ラムネー、ボナルドはどうか（無）
4. シスモンディ（歴史哲学とは無縁）
ドヌー（平凡）
5. 人類が完全なものになる可能性についてのプライスとプリーストリの見解
6. 歴史哲学についてデカルトとプラトンは何か言っているか（無）

⑥クーザン氏への質問（1824年7月10日）

モンテスキュー、ヴォルテール、グロティウス、パストレ、コント、クロイツァー、ヘルダー、アンシヨン、プリーストリ、ニーブールに関する質問のあいだに、「歴史」と「歴史哲学」の関係についての微妙な質問が混じる。

⑦書簡（1824年10月末？）

ドイツでクーザンが逮捕された（10月14日）との知らせに対するミシュレの反応。《フランスの名誉のために最も貢献した人間の1人が、同盟国〔プロイセン〕において逮捕されたというのは本当でしょうか》。

⑧書簡（1825年2月）

クーザン釈放の知らせを得たミシュレは、彼の不在のあいだに進めてきたヴィーコの翻訳が「完成」まじかであることを報告する。《8ヶ月のあいだ、私は絶対的にひとりでした。…けれども、あなたが私に与えてくれた指示に従いながら、少なくとも時間を有効に使おうと努力してきました。私はヴィーコの抄訳を完成し終えましたが、それは完璧なものだと思います。私は、それがヴィーコ作品以上に、体系の統一性を示していると自負しています》。

ミシュレはヴィーコの抄訳が完成に近づいたと判断し、それに自身の叙説を加えて年内にも出版できると考えていたらしい。だが実際には、更に2年の歳月が必要だった。

4 『近代史年表』（1825年4月）

クーザンあての手紙（1825年2月）の中で、ミシュレは1冊の歴史教材の出版について予告している。ただそれは《哲学的なものではなく、初歩的な教育に合わせたもの》だと謙遜している。

¹⁸⁾ Tableau chronologique de l'histoire moderne, *Œuvres complètes de Michelet*, tome I (1798-1827), édités par Paul Viallaneix, Paris, Frammarion, 1971, pp. 71-165.

『近代史年表』⁸⁾はたしかに教材であって、これを学術的な著書とみなすわけにはいかないかもしれない。だが、われわれにとっての関心は『年表』の学術的価値ではなく、ミシュレが教材の執筆を企て、その出版をめぐる先輩教師から思いもかけないクレームをつけられたことである。そこにわれわれは上昇過程にあった青年ミシュレの社会的体験を見ることができるとし、また同時に、そうした現実を前にしたときのミシュレが示す不器用で非妥協的とも思われる態度から、彼の学問に対する高い理想主義を予感するのである。

ミシュレがサントバルブ校で歴史学の教授となった頃、パリのコレージュには下記のような歴史家たちがいた。

カイクス	シャルルマーニュ校	古代史
ポワルソン	アンリ4世校	古代史
デミシュル	アンリ4世校	中世史
ラゴン	ブルボン校	近代史

はじめの3人とは異なり、4番目のラゴンだけが近代史の担当であり、彼はすでに1824年から『近代史概要』（全4巻）の刊行を開始していた。ミシュレが近代史の教材を出版すると聞いたラゴンは、それをライバルの出現と感じたようだ。彼はミシュレに抗議の手紙を送る（1825年3月5日）。《ニコル氏たち [パリ大学区長ニコルとサントバルブ校長ニコル] が貴兄に近代史の教科書を出版するように要請したとの話ですが、彼らは私に対しては一言もありませんでした。…けれども隠さずに申しますと、彼らは私がトロニオン氏から取得し、同僚たちすべてから承認されている権利を私から奪ったことになるのです》。

トロニオン氏は1822年までソルボンヌの歴史学教授であったが、コレージュにおける教科書出版の元締めの役割を担っていた。ラゴンは、すでに解職されてジャーナリストに転身してしまっているトロニオンの名を楯にとって、「近代史」における教科書出版の優先権を主張したのである。

驚き、困惑したミシュレはかつての同僚、シャルルマーニュ校の歴史学教授カイクスを訪ねるが、あいにく不在であった（3月7日）。ミシュレはラゴンに対して以下のような返書をしたため（3月8日）。《あなたの手紙は意外でした。…近代史の教科書出版に関して、あなたは排他的な権利を有していると考えておられる。しかしながら歴史は自由な領域です。まるでエジプトにいるかのように、書物を神聖視することなど私たちにはできません》[下線部は引用者]。ラゴンがその手紙の中で提案してきた共同執筆という妥協案に対しても、ミシュレは断固として拒絶する。《私は近代史の統一性 (unité) を明らかにすべく努めてきました。それ故、私の教科書は単一でなければならないのです》[下線部は引用者]。

歴史の研究は自由でなければならず、まさにそこから歴史の統一性も生まれるのである。われわれはラゴン氏への返事の中に、「科学の単一性 (unité) について」のミシュレによる叙説を予感することができる。だが、この手紙がラゴン氏に送られることはなかった。なぜなら、その日の中にミシュレはカイクスからの手紙を受けとったからである。《帰宅すると、あなたが私を訪ねてきたことを知りました。ラゴン氏の回答について話をしにいらしたのだと思います。すべて友好的にとりまとめることにしましょう。私はポワルソン [アンリ4世校の歴史学教授] に手紙を書き、わたしたちの側に立ってくれるように頼んでおきました》（3月7日）。

ポワルソンからも手紙がきた（3月9日）。《カイクスと会ったところです。…われわれの答えは完全に一致しています。こうした心のつながりがあれば、明日は完全なる成功を収めることができると思います》。ポワルソンはミシュレの内向的であるが故に激情に捉われること

がなくもない性格を知っていたのか、次のような指示を与える。《事を運ぶのはわれわれに任せ、とりわけ「教科書出版」の権利問題について発言するのは慎むことです。それ故、あなたにはほとんど完全に沈黙しているように命じます》。

ミシュレはポワルソンの命令を忠実に履行したのであろう。ラゴンは要求を取り下げ、『近代史年表』はこの年の4月7日に出版された。ラゴンの名はこのあともミシュレの『書簡集』に登場し、ミシュレのテキストをブルボン校でも採用するなど、関係は良好であったようだ。

5 「科学の単一性についての叙説」(1825年8月)

学者としてのミシュレの才能が輝きだすのは「科学の単一性」についての、短いけれども流麗な文体で書かれたこの「叙説」¹⁹⁾あたりからである。これによって、27才になったばかりの青年教師は、ギゾー、コンスタン、シスモンディといった大家からも注目されることになる。

「叙説」は1825年8月17日、コレージュの受賞式におけるスピーチとして朗読されたものである。たしかにこの朗読は教授として名誉ではあったろうが、ミシュレにはそれ以上に期する所があったようだ。彼は7月のひと月をシェイクスピアやスタール夫人の作品を読みかえすなどして「叙説」の執筆に全力を投入した。

こうして『近代史年表』と『科学の単一性についての叙説』の著者となったミシュレは、師とあおぐクーザンの指示に従い、ロワイエ＝コラル、シスモンディ、ギゾー、コンスタンといった大家たちに彼の小冊子を献呈する。

まもなく彼らから礼状が送られてきた。とりわけシスモンディの手紙は理解と好意に満ちたものであった(9月26日)。《クーザン氏の友人で、フランスの最も栄えあるコレージュの歴史学教授は、台頭してくる若い世代に対する大いなる期待を私に与えるものです。この期待はあなたの『叙説』を読むことによって確固たるものとなりました》。《あなたの仲間たちが皆あなたのように、若い人たちに向けて以下のことを教えてくれればよいと思います。すなわち、自身の本性の最も尊厳なるものを、もともと自分の中にあったものの中に、つまり自らの意志の行使の中に捜し求めるように、と》。[下線は引用者。この部分はまさしくミシュレの「叙説」の本質的な部分であり、ミシュレがヴィーコの著作から学びとり、彼自身の言葉で表現しなおしたものであるが、シスモンディはそれを的確に理解したのである]。

コンスタンもまた丁寧な手紙をよこし、出版したばかりの彼の著書(『宗教論』第2巻)をミシュレに贈呈して彼を感激させた。

その他、大学の教師や知識人、そしてコレージュの同僚たちからも礼状が送られてきたが、一風変わった返礼は、ミシュレの母の出身地であるランヴェの従姉セレスティーヌ・ルフェーヴルからのもの(10月15日)である。

セレスティーヌ(1796-1840)はミシュレの母アンジェリック＝コンスタンス・ミレー(1761-1815)の姉ジャンヌ＝エリザベート(1754-1822)の娘であるが、ジャンヌ＝エリザベートはジャン＝ニコラ・ルフェーヴルと結婚し、セレスティーヌを産んだ。ルフェーヴルはのちにランヴェの町長となる。ミシュレは『私の青春』の中で父方と母方の性格のちがいについて触れ、前者を情熱的、後者を理性的と評しているが、ミレー家の知的水準はかなり高かったようで、一族からは聖職者、教師、医師になった者もいる。ミシュレが『民衆』(1846)の中でキネに語ったような貧しい農民というイメージはかなりの誇張であったと思われる(従って、

¹⁹⁾ Discours sur l'unité de la science, *ibid.*, pp. 249-255.

ランヴェにおける『民衆』の評判はすこぶる悪かった)。以下に紹介するセレスティーヌの「批評」は無知な農民のリアリズムを代弁したものなどではない。むしろ反対に、ミシュレの仕事を理解し、彼の才能を高く評価するが故に、現在の境遇（コレージュの教師）が彼にふさわしくないと感ずる親族の情愛から発したものと言うべきであろう。

《[本を送ってくださった] あなたにお礼を言い、その著書について思索と文章の良い所だけを誉めるのが慣礼だということは知っています。けれども私には、古い決まり文句を若がえらせるような才機はないので、むしろあなたの作品の批評を述べようと思います》。

《この作品の中には、高邁で、明確で、哲学的な理念が、またそれを簡潔に、しかも明晰に表現する巧みな技法が、そして題材と完全に適合した気品のある文体が見られます。一体誰が、コレージュの埃の中からそうしたものが立ち現れてくると予期したでしょうか》。《おそらくあの人たち[コレージュの埃、つまり生徒たち]が哲学、理性、優雅さなどを受容れることなど絶対にないと思います。アルデンヌ県のリセの生徒主事ならば、声をそろえて次のように言うでしょう。聴衆のレベルに合わせるか、さもなければ別の聴衆を選ぶべきだ、と。私ならば後者をとります》。

「叙説」の中にミシュレの思索の深さと表現の才を読みとったセレスティーヌは、身内ならではの皮肉と愛情の混ざり合った語りの中で、敬愛する従弟の学者としてのスタートを祝ったのである。

6 「新しい学」としての歴史

「科学の単一性についての叙説」は、もともとコレージュの受賞式のスピーチであり、コレージュにおける教育の理念と方法について一教師が豊富を述べるというものであったが、ミシュレはそれにとどまらず、諸科学が人類の同一性という共通の理念の下で相互に結びつき、補い合うべきだという主張をおこなっている。中でも歴史学は——それが単なる「事実の科学」にとどまらず、「歴史の哲学」と結合するならば——人間の本性がどこにあるかを人間自身に目ざめさせ、未来を切り開くことを可能にさせるとミシュレは言う。「叙説」はまだまだ歴史の理論と言えるようなものではないが、彼が歴史学を「新しい学」の中心にすえたことは明確であり、歴史家としてのミシュレはこの「叙説」からスタートしたとみなすことができる。

全体は5つの部分——①科学の単一性 ②人類の同一性 ③諸科学の特徴とそれらの関係 ④人間はその意志において自由であること ⑤知の共同体——から構成されている。

①科学の単一性

ミシュレは生徒たちに向かって冒頭から次のように語りかける。

《諸君の年頃では…、細部に目が向いてしまい、全体を捉えることができません。学校で学ぶすべてのことが、孤立していて互いに無関係なものであるように見えても当然です。しかしながら、枝葉だけを見て互いに無関係だと思い、それぞれの科学が他の科学を照らし出し、豊かにするものであることを理解しないならば、科学はその生命力を失うことになります》。《諸君、本当の所は、科学はひとつなのです》。

②人類の同一性

なぜ「科学はひとつ」なのかと言えば、人類がその本質において同一のものであるからだともミシュレは説明する。だが諸民族が互いに憎みあい、戦争をくりかえしてきたことはクーザンの「歴史哲学について」(1823)の中でも再三言及されてきたことである。歴史が単なる「事実の科学」にすぎないならば、「同一性」ではなく「個別性」や「異質性」こそが人類史の特

徴だと言えなくもない。しかしミシュレによれば、それは「細部」であり、「枝葉」なのである。

《人間は孤立し完結した存在ではなく、人類と呼ばれる集合的な存在の一部なのです》。

《個人は一瞬のあいだ姿を現し、共通の思想と一体化し、それを作り変え、そして死にます。けれども種族は死なず、個人というはかない存在が産み出す永遠の果実を収穫するのです。…かくして諸世代は消え、諸民族は滅びますが、共通の思想は存在し続けます。それは常に同一であり、常により大きく、無数の異なった形をとりながらも常にひとつであり、それが人類の同一性を作り出しているのです》。

③諸科学の特徴とそれらの関係

教育者としてのミシュレは、ここで抽象的議論から一気に具体的なカリキュラムの問題に降りていく。彼によれば、生徒はまず「言語」の学習から始め、《幾世紀にわたって人類が残した遺産》を学ぶべきだという。次に「歴史」と「文学」、そして最後に「物理学」「数学」「哲学」が来る。しかし、諸学のあいだをとり結ぶ役割は「歴史」に与えられている。

「歴史」と「言語」の関わりについては、ミシュレは古代ギリシア・ローマの言語と文学の重要性を強調して次のように述べる。《青年たちが、ギリシア人やローマ人のような若い民族の文明を学ぶのは当然ではないでしょうか。わたしたちは彼らを古代人と呼んでいますが、彼らはその反対にすべてにおいて新しく、まさに人類の幼年時代を形成していたのです》。

「歴史」と「文学」——あるいは「記憶」と「想像力」——の関係についても、すでにヴィーコの『古代イタリア人の知恵』を読んでいたミシュレは、両者を結合する。《歴史の研究をむなしい観照に終わらせてはなりません。若者が生気のない古代の埃を嘆賞しながら老いていくようなことがあってはならないのです》。《実際、雄弁術においては、わたしたちがこれほどまで別々に鍛錬してきた諸能力、すなわち、記憶力、判断力、想像力が一体のものとして発展させられていたのです》。

「歴史」と「哲学」の関係は、一応クーザンの定義に従って、前者は「細部」と「個別」の学問、後者は「普遍化」と「体系化」の学問であると特徴づけられるが、実際には分離されるものではなく、哲学による普遍化は「個別」の中においてこそなされなければならない。つまり歴史をいかに生きるか、ということが哲学の課題なのである²⁰⁾。

④人間はその意志において自由である。

《哲学は人間に、もともと自分の中にあったものの中に人間の尊厳性を捜し求めるべきだと教えています。もともと自分の中にあったものとは何か。それは自らの意志の正しい行使です。個人的なものと思われている感覚、知識、天分ですら、その秀れた独自性は大部分が偶然の産

²⁰⁾ 青年ミシュレの中で「歴史」と「哲学」のどちらがより重い意味をもっていたかは、にわかには決めたい問題である。G・モノーによれば、「歴史」の選択はミシュレがサントバルブ校の歴史学教授に任命されたことによって生じたのであり、1827年にエコール・ノルマルの「歴史と哲学」の教授に採用されたときには、歴史よりも哲学の方にシフトを置こうとしたこともあったという。Gabriel Monod, *La vie et la pensée de Michelet (1798-1852)*, tome I, Paris, Champion, 1923 (Slatkin Reprints, 1975), chapitre X: «L'Ecole Normale — Le cours de philosophie», pp. 118-138. 1838年にコレージュ・ド・フランスの教授になったときも、彼の肩書は「歴史と道徳」の教授であり、ミシュレはその教師生活を通して狭い意味での「歴史学教授」であったことはなかった。「文学」や「哲学」、そして晩年に加わってくる「自然史」への傾倒をも含めて、ミシュレの「歴史」はより広い視野の中で理解されるべきものである。

物であるにすぎません。しかしながら、わたしたちの意志においてこそ、わたしたちは自由であり、本当の自分自身でありうるのです」。

スピーチの終わり近くになって、ミシュレはついにその結論に達したかのようなのである。だが演説はそこでは終わらなかった。

⑤知の共同体

ミシュレの言う「自由」とはいわゆる自由放任的な意味での個人主義ではない。ミシュレにとって自由とは、「個人」が自らの意志で自らを理想的なものへ高めていこうとする意志の強さを意味している。1830年代の『フランス史』では彼はそれをキリスト教に求め、1840年代の『革命史』ではそれを「民衆」に見出すことだろう。1820年代のミシュレは、ポーレ、クーザン、あるいはキネとの交わりの中で知識人としての自覚を身に付けつつあった。そしておそらくは友人や師に助けられて現在の自分があるという想いを教師の言葉にかえ、より若い世代に訴えかけようとする。

「若者は、他者との関係を見失うならば、自分自身のことも不完全にしか知ることができません。…[しかし] 年令も国も異なり、意見や利害が対立しているように見えながら、労働と努力の共同体の中で固く結びついているような自分とよく似た人間たちを若者は無数の存在の中から見つけ出し、同じ目的に向かって歩き出すのです」。

結びにかえて

歴史家ミシュレには「孤独な夢想家」というイメージが付きまとっている。おそらくそれは、『民衆』（1846）の序文の中でミシュレ自身が語った暗く貧しい少年時代の思い出からくるものであったかもしれない。友人ポワンソにあてた手紙の中でも、ミシュレは自身を社交下手な内気な青年として描いている。だが、歴史家としてのミシュレのその後の成長——とりわけ『フランス革命史』のミシュレ——を見るならば、「孤独」な青年はより大きな「連帯」の環の中に自らを開いていった。彼は人類がその障壁——階級、性、世代——を乗り越え、ひとつの祭りの中で結合するという希望を死ぬまで持ち続けるのである。

著書と著者——作品の主張と書き手の人柄とが常に一致するとは限らない。ミシュレの場合、歴史家としては社会的であるのに、個人としては内向的であるかの印象が強い。あえて古くさい比喩を使うなら、歴史書の中でのミシュレが男性的で力強いものに対して、日記の中のミシュレは女性的で——だからといって弱いというわけではないが——繊細である。だが、こうしたコントラストが生じるのも、われわれがこれまであまりにも日記という史料に依存しすぎていたためではないだろうか。

本稿においてはミシュレの書簡集のほんの一部に目を通しただけであるが、20歳を越えたミシュレをとりまく人間関係が年を追って急速に拡大していく様子が確認された。親友ポワンソへの内面告白に始まった往復書簡は、同僚ポーレに受けつがれ、さらに職場の上司、学界の大御所たちへと拡大していった。とはいえ、書簡の話題がいつも仕事上の用向きや学問的な内容にかかわるものだったわけではない。妻や子供に向けられたごくプライベートな手紙もあれば、家の修理をめぐる家主との交渉、子供の学業や寄宿費について尋ねてくる親たちへの対応など様々である。『書簡集』にはミシュレの生活のほとんどすべてが——「世俗的」なレベルから「学問的」なレベルに至るまで——盛りこまれている。

面白いことに、書簡の相手はその多くがパリという都市空間の中に暮らしており、ミシュレが日常的に接触している人々ばかりだった。勿論、母方の親族はアルデンヌ地方の住民であっ

たし、友人キネはまもなくドイツのハイデルベルクに留学することだろう。1820年代の終わり頃にはミシュレの通信圏もフランスの国境を越えることになるのだが、それでも書簡の相手のほとんどが面識のある人々ばかりであり、同じ部屋の空気を吸った人間であったことに変わりはない。要するに書簡集とは「ソシアビリテ」の交信記録なのである。学術的な高さや内面的な深みには欠けるかもしれないが、空間的な広がりがあり、何よりも人間的で日常的な構造に支えられた世界であった。

作品としては物足りないかもしれないが、書簡集はミシュレの知られざる素顔をわれわれに垣間見せてくれる興味深い史料なのである。

(筑波大学歴史・人類学系教授)